

棋士の情景

～勝負の厳かでは、どんな時代も変わらない～

棋士・九段 島 朗

(第4話)

伝統の継承

土曜日の夕刻、専門チャンネルで王将戦の藤井聡太王将対挑戦者・永瀬拓矢九段の対局を視聴しました。

二日制タイトル戦の一日目、いったん指し掛けになるため「封じ手」、定刻18時に手番側が指し手を記し、封緘して立会人に預ける儀式が行われます。この日の手番は、藤井王将となりました。

定刻過ぎて考えても自分の翌日分の持ち時間が減るだけで、何らルール上は差し支えありません。ただ定刻前に指す手が決まっていれば、多少自身の時間を使っても封じ手に持ち込むのが戦略的に常道ですので、通常は18時ちょうどか、過ぎててもほどなく執り行われます。

しかし、この日は違いました。すでに勝負どころ、定刻を迎えても藤井王将の表情は険しいまま。妥協という言葉はなく、これまで安易な選択をしたことのない姿勢こそ、若き大王者の強さの源泉です。緊張感みなぎる時間が、10分・20分と流れ、近年では異例の光景が映されていました。

18時半前に、藤井王将が意思表示をされ、時計をとめて別室にて記入し、対局室に戻られます。

両対局者の署名が必要なため、藤井王将が相手の永瀬九段のほうに差し出すのですが、このさりげない場面が実は現代風と私は思っていて、平成中ごろまでは封じ手を記した棋士が立会人に手渡し、その立会人が相手にさらに渡す、仲介業務が慣例だったのです。おそらく、対局者同士の直接的なやり取りを避ける意味合いが含まれていたのかも知れませ

ん。いつからか何となく、合理的にいまのように変わっていったのだろうかと、自分はこのシーンを拝見するたびにそう解釈をしています。

封じ手を待つ立場の永瀬九段は、一日の仕事を終えて一安心、という雰囲気は微塵も見せず、緊張をときません。彼は努力の棋士として知られ、質量ともその研究は他の棋士の追従を許さず、公式戦・今回のような大舞台でも、常に準備万端で精緻な序盤は棋士から見ても圧巻です。

藤井王将に対し、早い時期から人間的な素晴らしさと将棋への高い技量に尊敬の念を持ち、それを率直に表してやみません。

永瀬九段にとって、藤井さんとの対局機会こそ一番の幸せな時間に思う様子が、伝わってくるようです。

私も棋界に入って50年、こうした真摯な若きトップの対局場面には、その度に新鮮で、深い感銘を受けます。

その姿に言葉は不要です。子どもたちが見る時、多くのものを感じとるでしょう。

両棋士だけでなく、いまの将棋界の若者たちは人材の宝庫と私は常々感じていて、両対局者に近い世代は、羽生善治会長に代表される年代の所作や姿勢を手本にしてきたはずで、また羽生九段だけでなく佐藤康光九段・森内俊之九段も、谷川浩司十七世名人らの世代をお手本にされたことも間違いありません。

将棋界で美しい部分の一つは、こうした厳かな教育とも言うべき、伝統の継承が暗黙の了解のうちに浸透していく姿のように思います。